
貴方にとって、誰が一番大切ですか

飛海 ガクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方にとって、誰が一番大切ですか

【Nコード】

N0456I

【作者名】

飛海 ガクト

【あらすじ】

「俺は、絶対護るって約束したんだ……！」ロックはティナとセリスを護るという約束をしていたが、最近、彼女らの動きが怪しくて……。失恋気味のロックに付け込むエドガー。しかも、4人は三闘神戦で同じチームになって！？FF6でエドロク&セリティナです。

第1話：発端（前書き）

カオスでS（何

エドロクでセリティナ、同時に存在しています。

若干NLっ気もありますので、苦手な方は御注意下さいませ。

第1話…発端

「ねえ、ロックは本当は、誰の事が好きなのかしら？」

「え……？」

ティナの真っ直ぐな瞳が、呼ばれて振り返ったセリスに突き刺さる。

「ロックは……やっぱり、レイチェルさんの事は忘れられないと思うから……」

そう言つて、ティナは目を伏せた。

……きつと今、ティナの脳裏にはレイチェルが映っているのだろうと思い、セリスも目を閉じる。

あの時見た、レイチェルの病的なまでの美しさが、今でも鮮明に思い出された。

「そう……多分、ね」

私たちには分からない事だわ、とセリスは付け足す。

そう、ロックの考えている事は、ティナとセリスには全く分からなかった。

「ロックは私を護ってくれと言った。けれどそれは、レイチェルにも貴女にも言っているでしよう？」

「ええ……セリスも、言われたのね」

護る、と言うだけなら自由だとも、思っているのだろうか。

結局は、誰一人護れていないのに。

セリスは決してロックを嫌ってはないが、そんな皮肉じみた事を思った。

「でも……ロックは多分、レイチェルも、貴女も、勿論私の事も好きじゃないと思うわ」

「……え？ そうなの？」

「そうよ。多分ね」

何でそんな事が分かるの？ とでも言いたげに、ティナはセリス

を見返す。

「だって……………」

セリスはこそと、ティナの耳に口を寄せて囁いた。

そして、セリスが身体を離すと、ティナは魔法でもかけられた様に放心状態になっていた。

「そんな……………そうなの？」

「多分の話よ。私から見たらそうとしか思えないけれど」
知らなかった、とティナは口の中で呟く。

「……………そうだったの」

本当に多分の話よ、とセリスは念を押す事を忘れない。

けれど、『多分』とは言っても、やはりそうとしか思えない自分が憎いセリス。

「ロックって……………そういう人だったのね」

「いいえ、ロックだけじゃないわ」

「？」

セリスは軽く首を横に振って、またティナの耳に口を寄せた。

……………そう、そう見えるのは、決してロックの所為だけではないと。
勿論相手にもその気が有るのだと、セリスは感じていた。

第2話：運命

「それじゃ、行くぞ」

セツツアーはそう言つて、空に浮かぶその大陸に飛空艇を寄せる。皆の気が、ギョツと引き締まるのを身に感じた。

「向こうは俺とマッシュで行く」

「え……2人で大丈夫なの？」

「ああ」

心配そうにセツツアーを見るティナ。

しかしセツツアーは、平気だと笑う。

「あっちはモグ、ストラゴス、リルムで頼むぞ」

「……大丈夫なの？」

「大丈夫だろ」

そこで、何かがおかしい、と感付いたのはセリスだった。

「待って……チーム分けがおかし過ぎると思うわ」

どうしてわざわざ、セツツアーとマッシュを2人で行かせるのか。

確かに2人はズバ抜けて強く、2人でも十分だろうが。

それくらいならモグチームの誰かと組んだ方が確実だろうとセリスは思う。

「此処はロック、エドガー、ティナ、セリスな」

「え……」

絶句するティナ。溜息を吐くセリス。

こんな事だろうと思つていた、とセリスは思ったのだが。

「ねえ……私も、おかしいと思うわ」

ティナはじつとセツツアーを見つめた。

「くじ引きでこうなった事、忘れたか？」

「……………あ」

自分が抗議を受けるのはおかしいとでも言いたげに、セツツアーは答える。

前にくじ引きやって、これで良いって皆言ってたろ、とも。

「でも……あの時は、くじ引き結果を見てなかったから……」

「『ワクワクするからチーム分け発表はなくて良い』って言ったのはロックだ」

「……!」

ギツとセリスの鋭い視線に射られ、ロックは後ずさる。

「止めとけ。さ、早いところ三闘神を倒そう」

「そうね……それが先決だわ」

セリスは諦めた様に溜息を吐いて、早々に飛び降りた。
危なげなく地面に着地し、ティナの方に手を伸ばす。

「ティナ……捕まって」

「有難う、セリス」

其れは男の役目だろ、と思っているエドガーなど無視し、セリスはティナを抱き止めた。

「ロック、エドガーも早くして」

「他の人達が降りられないわ」

「……ああ、そうだな」

ため息混じりにそう答え、エドガーも飛び降りる。

振り返ってロックに手を貸そうとしたエドガーだったが、既にロックは着地していた。

「危なくなったらいつでも戻って良いからな!」

「ええ、そっちも気を付けて!」

……というか、貴方達の方が気を付けてほしいわ。

セツツァーに返事をするティナの隣でセリスは思う。

そして、飛行船が遠ざかった頃、セリスはギツとまたロックとエドガーを睨みつけた。

「……必要以上にティナに近付かないでよ」

ティナに聞こえない様に、小さな声で牽制するセリス。

「其れと、危なくなったら自分の命を捨てても必ずティナを護る事。良いわね?」

「……………はい」

セリスの剣幕に押され、ロックとエドガーはそうとしか答えられない。

了解の返事を聞いたセリスは満足したのか、ティナの方へ行ってしまった。

「ティナ。少しでも身の危険を感じたら、ロックかエドガーの後ろに隠れて」

「え？　でも……………」

「本当なら私が護るべきなんだけど、貴女を護り切れるかどうか……………少し、不安なの」

ルーンナイトなのにね、と自嘲気味に笑うセリスが綺麗だ、とティナは思った。

第3話：悔恨

そんな2人を見ていて、溜息を吐いたのはロックだった。

護る、と言ったのは、勿論嘘ではなかった。

その時真剣に思っていた事だし、今だってそう思っている。

彼女達を、この手で護りたい。

光を失いかけているこの世界で、希望の光と成り得る彼女らを。

……だがしかし、そう簡単にいく筈もなかった。

ロックはレイチェルを見つめていた。

もう二度と開く事のない、その瞼の奥。

綺麗なまま、もう朽ちる事も老いる事もない、愛しい人。

同じ時を重ねられない事など、とうの昔に分かっていた筈だった。
分かっていた筈なのに……気が付くと、レイチェルの事を思い出
してしまう。

……忘れられない。逃れられない。

ティナ、セリス……。

護ると、約束したのに。

気が付けばいつの間にか、ロックが2人に護られる様になっ
ていた。

自分とは違い、しっかりと大地を踏みしめ、生きている。

過去を振り返らないわけじゃない。しかし、ロックとは違う。

自分で言った事も護れない様なロックと、彼女らは違った。
生きて、いつの間にか強くなっていて、ロックを必要としなくな
っていた。

ロックは、誰かに必要とされたかったのか。
自分が「護る」と、そう宣言する事で、存在を認識していてほし
かったのか。

「……ロック、おい、ロック？」
「っ！？」

ロックが名を呼ばれ我に返ると、視界を埋めていたのは金色。
見目麗しいフィガロ国王が、ロックの顔を覗き込んでいたのだっ
た。

「どうした、お前……さっきから変だぞ。生返事だし」
「え……や、何でもない」
「……そうか？」

生返事、と言われても、ロックには返事をしていた記憶さえない。
まだ疑う様にロックの方を見ているエドガー。

……レイチエル、昔の恋人の事を思い出していた、などと言える
わけがない。

近くにティナとセリスの影は見当たらなかったが、女性を大切に
するエドガーの事だ。

何か言ってくるに違いない、とロックは思い、話題を逸らそうと
した。

「ティナとセリスは？」
「先に行った。……って、お前が「先に行ってて良い」って言った

「んだろ」

「……………え？」

そうだっけ、とロックはエドガーに目で問いかける。

「……………大丈夫か？ お前。本当に」

凄く心配だとしても言いたげに。

エドガーはまたロックの顔を覗き込んだ。

「何か悩みが有るんだったら、相談しろよ。仲間だろ？」

「……………！」

そう言っって笑うエドガーに、ロックの心臓は跳ねる。

「とりあえず、行こうか。またセリスが怒る」

クスクスと笑いながら、自然に手を差し出すエドガー。

跳ね除ける理由も必要もなかったので、ロックは素直にその手を取った。

第4話…後悔

「遅いわ」

セリスは走ってきたロックとエドガーに目もくれず、そう言い放つ。

……勿論、視線をそちらにやらなかったので、2人が手を繋いでいたのも知らない。

「大丈夫？ ロック」

「え？ あ……ああ」

心配そうにロックの顔を覗き込むティナに、ロックは気付かれないう程度に後ずさった。

ティナが近付いてきた時点で既に握った手は振りほどいていたので、其れについては何の問題もない。

しかし、やはりティナとセリスに接するには、ロック的に多少抵抗が有った。

「！ 敵が来るわ！ 皆、気を付けて！」

突然警告の言葉を放ち、セリスは大きく後ろに跳躍する。得体の知れない恐竜みたいなのものの突進をかわしたのだ。

「……っ！」

「！ ティナ！！」

しかし、ティナは背後から近付くモンスターに気付かず、まともに突進を喰らう。

バランスを崩すティナを受け止めたロックを見、モンスターを倒していくセリス。

エドガーとセリスの素晴らしい連携プレイでモンスターは瞬殺された。

「ティナ……ティナ、大丈夫！？」

セリスは走ってティナの許へやってくる。

そしてロックの腕の中からティナを奪い、自身の腕の中へと閉じ

込めた。

「氣を失っているだけみたいだ。暫くしたら……」

「ロック……っ！」

また、セリスはロックを睨む。

しかし、其れはさっきとは違う強さを持っていた。

深い怒り、悲しみ、期待を裏切られた失望の色。

セリスの瞳の中に、ロックは強い感情を見る。

「護るって……言っただじゃない……っ！」

「……！」

そう言っ、ぼろぼろとセリスの目からは涙が零れ落ちた。

「大切なら、一人くらい護ってみせてよ！ 本当に大切なら……！」

セリスは言い切ると、ふいと顔をそむける。

言外に『貴方はまた同じ過ちを繰り返そうとしている』と匂わせる様に。

「セリス……」

セリスは答えず、ティナにケアルをかける。

ケアルは外傷のみに有効なのか、セリスはそんな事も知らなかったが、ティナの無事を願う。

……いや、他に出来る事もなかった、と言うのが正しい。

普段は構えている分ダメージも少ないだろうが、先程のは不意打ちだ。

何ともないと良いけど、とセリスは思う。

「……ん……」

「！ ティナ……！！」

それから数分も経たない内に、ティナは目を覚ました。

「良かった、ティナ……平気？ 痛いところはない？」

「え、ええ……平気よ」

「そう……良かった」

セリスに抱き締められ、何が起こったのかさえ分かっていないティナ。

「気を失ってたのよ……あの忌々しいモンスターの所為で」
「気絶していた人自身にはあまり、『気絶していた』という認識はない。」

その間の意識が欠落している為だ。

なので、セリスは大雑把にその数分間の出来事を話す。

「そうだったの……皆、ごめんなさい。私の所為で……」

「気にしないで。ティナの所為じゃないわ」

何処も怪我が無いなら良いの、とセリスは笑って見せた。

「私はもう平気だから……行きましょう？」

「そうね。他のチームを待たせるわけにはいかないものね」

「ええ………ロック、どうしたの？」

セリスの言葉に頷いたティナは、フとロックに視線をやって声をかける。

その表情は先程より沈んでおり、何だかティナの言葉さえも聞こえていない様だった。

「ねえ、エドガー………ロック、どうしたの？」

「ああ………気にするな。いずれ治るだろう。それよりティナ、君は大丈夫か？」

「ふふ………私は大丈夫よ、有難う。でも、それよりロックが気になるわ」

「放っておいた方が良いわ、ティナ。今は多分忙しいのよ」

「忙しい………？ ……分かったわ。でもちゃんと来てね、ロック」

多分ティナには分からないと思うけど、と思っていたセリスだったが、ロックはティナの最後の言葉に頷く。

若干ティナとエドガーに気にされつつ、ロックは、先程の事を思い出していた。

第5話：発見

俺はまた護れなかった、とロックは歩を進めながら思った。

前方の緑と金の髪が踊る様子を、視界には入っている筈なのに、意識が認識しない。

若干放心状態で、其れでも、思考だけはしっかりしていた。

セリスから責められるのも当然だと思っていた。

致命傷には至らなかったものの、気を失う程の衝撃を受けた。

激しい戦闘を数多も潜り抜けてきたティナだから、というのはロックも良く分かっている。

これがレイチェルだったら……間違いなく、致命傷だったろう。

セリスであれば鍛えられている分、まだマシだったかもしれないが。

しかし……どちらにしろ、護れなかった事には変わらない。

『護る』と言ったのに。自分が宣言した事なのに。

今も変わりなく思っている事を自分が守れないなんて、何と情けない事だろう。

踊る緑と金の髪を見て、思った。

今度こそ護ってみせる、と。

漸くロックの目に、意識に、2人が映った。

仲が良さそうに笑う2人。ティナとセリス。

その様子を見て、ロックの胸は知らず痛んだ。

……レイチェルの事を、忘れられないのに？
もう死んでしまった恋人を、引きずっているのに？

ロックは気付く。

護ろうなんて、只の傲慢だったのだと。

未だ恋人の事を想い続けているのに、護ろうだなんて。
罪滅ぼしとか、大切だからなんて、もっと最低だ。

セリスから責められるのも、当然だと思った。

「ロック。もう今日は止めておこう」

「え……何が？」

声をかけられ、顔を上げると、直ぐ其処にエドガーの顔が在った。
ロックは突然のエドガーの言葉に困惑する様に、眉を寄せて問い返す。

「お前、何か今日は変だ。こんな状態じゃ三闘神なんて、倒せない
だろ」

「っ、そんな事な——」

「私も賛成」

いつの間にか、ティナもロックとエドガーの傍にやってきていた。
微笑を浮かべてエドガーに賛成する。

「ね……いつでも戻ってきて良いつて、言っていたし、今日は戻り
ましょう」

そんなに変だったか、と無自覚だったロックは思った。

「ねえ、セリス。セリスもそう思うわよね？」

「そうね……ティナがそう言うんだったら、戻った方が良いかもしれないわね」

チーム分けもおかしいし、とティナとセリスは話し始める。

其れにはロックも同感だった。

殆ど自分から言い出したも同然の事だが、やはりティナやセリスと顔を合わせるのはあまりにも気まずい。

「じゃあ、早く戻ろう。他のチームにも早く連絡した方が良いし……」

そう言ったエドガーの台詞を遮る様に、足元に、大きな影が差し込んだ。

「おーい、今日は引き上げるぞーっ！」

「……セツツァー！」

見上げると、飛空艇から身を乗り出すセツツァーが居る。

既に引き上げようとしていたのか、とエドガーは苦笑を漏らした。

第6話：休戦

「ねえセリス……ロック、どうしたんだと思う？」

「どうって……」

知らないわ、と言いかけて、ティナの瞳の中の真剣な光に口を閉ざした。

数秒のち、セリスは言葉を紡ぐ。

「貴女を護れなかった事を、悔やんでいたんじゃないかしら」

あながち間違っっては、というか合っている筈だとセリスは思っていた。

……多少、自分の言動の所為かもしれない、と思っではいたが。

「私を……じゃあ私、今度から、ロックと違うチームになるわ」

「……え？」

そう言うティナの瞳は、やはり真剣だ。

「きっと、私が居たら、迷惑なのよ。私、護ってほしいなんて、思っ
てないのに……」

「な……っ」

ティナは笑って誤魔化そうとするが、セリスは何も言えない。

「護ってほしいわけじゃ……ない、の？」

「ええ。護ってほしいわけじゃないわ」

私護られなくても平気よ、とティナはまた笑って見せた。

しかし、其の問いの意味は、ロックを心配してという事ではなく。

「私……私を護ろうとして、傷付いたら嫌だとは思うけれど……」

ティナは今度は目を閉じて言った。

「其れに、ロックには、もっと護りたい人って居ると思うの。私たちより」

「……………そうね」

其れはそうだ、とセリスは心の中で同意した。

レイチェルの事を忘れられない事など、2人には既にお見通しで

ある。

そして、其の所為で若干挙動不審だったというのも、セリスには何となく見当が付いていた。

「男って、下らないのよ？ 直ぐに裏切るし」

「そんな事ないわ。ロックの事を言っているのだったら……ロックは、裏切ってなんてないわ」

「……？」

ロックが裏切ってない？ とセリスは視線で問う。

「ロックは本当は、レイチェルさんを護りたかったのよ。けれど、護り切れなかった。だから、罪滅ぼしっていうか……代わりに、私たちを護りたいって思ったんだと思うの」

「……其れ、フォローになってないわ、ティナ」

更に最悪よと、心の中で溜息を吐いた。

「だったら私は、ロックがもつと裏切ったって思うわ。私たちの事を見ていなかったの。私たちの向こうに、レイチェルを重ねていたのよ」

「…………セリスって……」

「……何？」

ティナは言葉を放って、一瞬沈黙したが。

セリスに先を促され、口を開く。

「……ロックの事、好きなの？」

「なっ……」

ティナの言葉に、セリスの頬はみるみる赤くなっていった。

其れを面白いとでも言いたげに眺めるティナ。

他意というか深く考えていないからこそで、セリスは、性質タチが悪いとまた溜息を吐く。

「まさか。私、あんな人好きじゃない」

セリスはきっぱりと断言した。

「そんな……そこまで、はっきり言わなくても良いじゃない」

「だって、貴女にそんな誤解をされていると思うと、虫唾が走るも

の

「？」

「どういう意味か分かっていないティナに、気楽で良いかとセリスは思う。」

「良いの、忘れて。……いつか、分かる時が来るんじゃないかしら」

「……？ そうなの？」

「ええ、そういうものよ」

「限りある純粋な時代を大切にしないとね、と言いながら、セリスはカーテンを開け放った。」

向こうには、浮かぶ魔大陸が見える。

……決戦の地。今日でケリが付けば良かったんだけど。

時を重ねる毎に近付きたくなくなる。

死が恐ろしいなんて今更ね、とセリスは、夕焼けに沈む魔大陸を見ながら思った。

第7話：真実

「駄目だ」

「……何故？」

NOと即答するセツツァーに、セリスは食ってかかる。

「私達は一緒に居るべきじゃないの。分かる？ 戦力的にも心配する必要はないし。貴方とマッシュなら問題ないわ。けれど、モグ達のチームが心配なのよ……」

其れはそうだな、とセツツァーは言った。

「だけど、決めた事だ。「これで良い」と言った筈だ。信じられないのか？」

「そういうわけじゃないわ！ ……ただ……」

「なら信じろ。仲間、だろう？」

何故こだわるの。

私は……皆に、死んでほしくないだけなのに。

セリスはセツツァーを睨み付ける。

「どうして分からないの！ もしかしたら死んでしまうかもしれないのよ！？ なのに、そのチーム分けにこだわる必要でも……」

「……なかったら、こんな馬鹿なチーム分け、絶対にさせないさ」

ハ、とセリスの剣幕が緩んだ。

「俺だって不安だ。いつ誰が死ぬか分からないのはいつもの事だが、其れでも……いつもなら、もっと死なない様にチーム分けを考える筈だろう。それなのに、あのジジイ……」

「……え？」

セツツァーが漏らしたのは不満で。

憎々しげな表情には、殺意にも似た嫌悪が見え隠れしている。

「楽しんでるのは、『ストラゴス』とかいうじいさんだ。このチーム分けを仕組んだのもな」

「は……！？」

「ふざけていると思うだろう。しかしあのジジイ……強いんだ。絶対チームを変えさせない」

セリスは呆気にとられ、何も言えなかった。

「俺だって、出来る事ならこんなチームはやめたい。ジジイが一番死にそうだ」

『ジジイ』……ストラゴス。

あんなよぼよぼの青魔道士が、とセリスは思う。

「ふざけた事をぬかしやがる。何をそんなに楽しんでいるんだか——」

「……………許せない」

セリスの口からは、憎悪の言葉。

「私……絶対許さないわ」

身にまとう黒のオーラ。まさに『最強』。

圧されセツツァーは何も言えない。

「その事を知ってたらセツツァーの事も責めなかったのに……分かったわ。何処に居るか知ってる？」

「さ、さあ……自分の部屋に居るんじゃないか？」

「そう、有難う」

違ったら殺されそうだ、ストラゴス、自分の部屋に居ろよと願うセツツァー。

オーラだけで床や壁を壊せそうなオーラを今のセリスはまといている。

……何をそんなに、怒る事があるんだか。

頼むから、宿屋なんだから建物だけは破壊しないでくれよ……と。セツツァーが言葉に出来るわけもなく、ただ、心の中で溜息を吐いた。

第8話：邪魔

「ほんつとムカつくわ、あのジジイ……」

「？ セリス、何か有ったの？」

足音荒く、セリスはティナと同じ部屋に帰ってくる。

お風呂上がりらしかったティナはバスタオルを肩に掛けたまま、セリスを出迎えた。

「いいえ、何もないわ……其れより貴女、もうお風呂入っちゃったの？」

「そうなの……？ ごめんなさい、何だか気持ち悪くて」

「……良いわ。仕方ないものね」

確かロックに触れられたところは、とセリスはティナの身体をざつと眺める。

勿論、痕など付く筈もなかったので、ぱっと見は良く分からなかったが。

自分が洗ってやろうと思っていたのに……。

「じゃあ、私もお風呂に入ってくるわ。その後にも、明日の話をしましょう」

「ええ。……でもさっき、もうそろそろご飯だって、ロックが呼びに来てたわ」

「……………え？」

セリス的に聞き捨てならない言葉が今、ティナの口から発せられた。

「何……ロックが来たの？」

「ええ、ついさっき。入れ違いになったのかしら」

「ついさっき!？」

「そうだけど……ねえ、セリス、どうしたの？ 今日は何だか少し変よ」

ティナは心配そうに言ったが、セリスには全く聞こえていない。

手をわなわなと震わせ、何かをぶつぶつと呟いていた。

「そんな……ロックが、お風呂上がりのティナと接触するなんて……ロック……変な気を起こしてたら……」

「ね、ねえ……セリス？」

と、セリスの肩にティナの手が触れた瞬間、セリスはぱつと勢いよく顔を上げた。

「ティナ、ロックには触れられてない！？ 平気！？ 近くに寄って来たわけじゃないわよね？」

「え……ええ……触れてないし、そんな近くでもなかったわ」

「そんな近くでも……って、そんなって？ 近かったの！？」

「ええと……ねえセリス、とりあえず落ち着いて……？」

落ち着けるわけないわ、と思いながらも、ティナに諭されたのでセリスは大人しく椅子に座る。

そこで漸く、ティナの普段は綺麗なウェーブがかかった髪が、今はストレートになっている事に気が付いた。

「……貴女の髪って、ストレートにもなるのね」

「え？ ええ……でも乾いたら、直ぐに元に戻るわ」

其れは髪が元に戻る事を喜んでいる様にも、悲しんでいる様にもとれる。

セリスはティナの其の言葉の真意を測りかねた。

「……ふう……仕方ないわね。夕食の前に、私が訊いてきた話を話すわ」

「良いの？ お風呂は」

「夕食後に入るから良いわ。貴女と一緒に」

「……………え？」

ティナの困惑の表情をセリスは見ない振りをしたまま、話し始める。

「あのね——」

「……そうだったの」

ストラゴスの辺りになると突然眉間にしわを寄せるセリスを何とか宥めながら、一言の感想を漏らすティナ。

セリスはだがティナのおかげでちゃんと平常心を取り戻し、今は自身の淹れたコーヒーを飲んでいた。

「そうよ。ふざけていると思わない？」「変える気はない」とか言い出したのよ、あいつ」

「……其れはもう、5回聞いたわ……」

だから落ち着いて、とティナはまたセリスを宥める。

「何故なのか、理由も教えてくれなかったのよ……」

セリスはまたコーヒーを一口飲んだ。

何故なのだろう、と地平線に未だ名残惜しそうに残っているオレンジを見ながら思う。

信頼を与え合うのが仲間なのに、これでは『仲間』と言えないではないか。

あのジジイは何を……。

「ねえ、セリス……きつと、考えがあつての事なのよ。だからもう、怒らないで……」

「これで考えがなかったら、殴り殺してるわ」

セリス、とティナは小さくセリスを詰る。

撲殺なんて、と。

「本当に、だって、何考えてるか分からないじゃない。三闘神戦よ、重要な戦いよ、皆が生きなければならぬのに」

「……そうね。そうよね」

「そうでしょう？」

ティナは分かるわ、と呟く。

「だから——」

「おい、メシ食いに行くぞーっ！」

セリスの言葉を遮って、階下からセツツァーの声が聞こえてきた。

またセリスがキレそうになったのを、ティナは悟る。

「セ、セリス……とりあえず、食べに行きましょう」

「……っ」

「セリス……」

凄まじい形相で無言のセリスを引っ張って、ティナは部屋を出た。

第8話：邪魔（後書き）

思ってたんですが……

夕食の知らせのみなら普通、部屋のドアなんて開けませんよね ^ p

^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0456i/>

貴方にとって、誰が一番大切ですか

2010年10月9日23時50分発行